

令和4年度 第2回

精神保健福祉士養成学科 教育課程編成委員会 報告書

開催日時：令和5年2月10日（金）15:30～17:00

場所：zoom形式

参加者名

委員 阿部 未麻貴（医療法人社団総合会 武蔵野中央病院 相談室長）
委員 瀬川 聖美（社会福祉法人 本郷の森 理事長）
委員 関原 育（東京都精神保健福祉士協会 監事）
教員 岡崎 直人（精神保健福祉士養成学科 学科長）
教員 根本 典子（精神保健福祉士養成科 科長）
職員 松丸 浩子（事務局長補佐）
職員 松木 健太（教務課）

1. 令和4年度 報告（岡崎・根本）

今年度の状況報告を行った。

◆授業実施形態

コロナウイルス感染拡大時期もあったが、原則全員登校という形で授業を進められた。コロナ感染者や濃厚接触者に関しては待機期間を Zoom でのオンライン授業としたが、昨年度と比較し、多くの学生が対面授業を受けることができた。

◆中退者

現時点で5名の退学者がでている。（進路変更2名、体調不良3名）

今年も一定数の退学者が出てしまったが、学生の様子を見やすく面談も行えたため、例年と比較すると抑制できたと感じている。

◆実習について

現在、春の実習を開始したところ。120時間の施設実習は全て配属実習で実施。90時間の医療機関実習は学内実習と配属実習を混合し実施した。一部コロナ感染などで実習時間が不足した学生については3月上旬に学内実習を実施する。

3. 前回まとめの進捗状況について

①卒業アンケートはより具体的な情報を拾えるよう、自由記述項目を増やし実施するとともに、卒業フォローにもつなげていく。

◆卒業アンケートについて（岡崎）

卒業アンケートを10月に実施した。回答は14名（回答率23.3%）となった。アンケート結果（内容）は添付資料①の通り。アンケートの回答を見ると対面にて受講されていた方が多く回答されている印象を受けた。

・オンライン授業について

「気が散ってしまって授業に集中できなかった」「出席の返事だけ行い、授業に参加されていない方もいた」「機器トラブルもあり、生徒全員が平等に授業を受けられるようにしてほしい」などのマイナスの意見が多くあった。

・医療機関のオンライン学内実習については

「十分な学習ができた」という回答は1件もなく、厳しい評価となった。コメントには「講義からの想像だけでは不十分と感じた」「実際に現場に立って、職員の動きや利用者との関わり方を見たり聞いたりすることが重要だと感じた」という声もあった。

・医療機関で実習を行えなかったことで困ったこと

実際に医療機関に就職した学生からのコメントがあった。「実習を経験した学生から後れを取っているという不安感」「実習した前提で業務が始まり、周囲との差を感じた」という声があった。

本校としてもオンラインでの授業及び、学内実習は苦肉の策ではあったが、現場にて実習を体験することの重要性を改めて感じたと同時に、具体案は未定だが卒後フォローも検討を進める必要があると感じた。

<質問・意見>

阿部委員) 医療現場で実習できなかったことへの戸惑いが見て取れた。医療機関のPSWは何をしているのかイメージしづらいということもあると思う。そのため就職活動などにも影響があったのだと感じた。また、現場実習をしていないことで、周囲から出遅れたというコメントもあったが、やはり事前にイメージがしづらかったことの影響だと感じた。

松木) 実習に取り組む目的意識がはっきりと持っていたかも重要なポイントのように感じる。次年度以降の学生が現場実習に行くにしろ、行けないにしろ、現場実習に行けなかった先輩たちの声を伝え、きちんと目的意識をもって有意義な実習になるよう指導しておく必要があると感じた。

関原委員) 実際の現場では組織の利益を考えることもあるが、オンラインの学内実習だけでは、そのあたりは見えず、学校で学ぶことと現場とのギャップが大きかったのだろうと感じた。現場実習ができればそのあたりも多少見えてくるかなと感じる。

瀬川委員) 医療機関を希望する学生が多いなということを改めて感じた。また、実際に現場を見るということがいかに大事かということを感じた。来年度以降、ぜひ現場実習ができるとう良いなと感じる。

岡崎) 今回のアンケートが「医療機関のオンライン実習について」の回答を求めたため、医療機関の希望者が目立つような意見が出てしまったのだと思う。

②カリキュラムポリシーは業界のニーズと大きな相違はないが、『コミュニケーション』『問題発見・解決』また、『勉強し続ける(探求心)意識付け』は特に重要な項目と言える。どのように授業に落とし込んでいくかは今後の課題となる。

③カリキュラムポリシーについては専任教員だけでなく、非常勤教員にも共有し、授業構成時に意識していただくよう依頼していく。

◆カリキュラムポリシーについて(根本)

②③は連動する内容となる。カリキュラムポリシーをいかに授業に落とし込んでいくか、また、非常勤教員に落とし込むということを考えたときに現行のカリキュラムポリシーでは、複数科目群においてカリキュラムポリシーを設定しており、落とし込むには不十分という結論に至った。

次年度は現行カリキュラムの最終年度となり、再来年度には新カリキュラムに移行するため、カリキュラムポリシーも再考する考えである。そのため次年度での継続審議とさせていただきたい。

新たなカリキュラムポリシーは科目群で設定するのではなく、科目ごとに落とし込み策定していきたいと考えている。

4. 対応の迷う学生について（岡崎）

近年、当事者性のある学生も増加傾向にあり、実習先でのトラブルも出てきた。今回ご意見をいただきたいのは、事前オリエンテーションにて服装を注意されたことで、「実習が不安」「死にたくなってしまおう」「主治医からの診断を提出するので学内実習にしてほしい」などの相談があった事例について。

学校としては学内実習はあくまでコロナ対策の手段であることからサポートしながら現場での実習を指導している。服装なども指導はしているが、どこまで注意を行う必要があるか、世の中の情勢も鑑み悩ましいところである。

阿部委員) 学校としての教育の意義、どういったことに重きを置くかによると思う。専門職の育成と考えれば、実習は行うべきだと感じる。実習を通して自分自身と向き合い、変わっていくということがとても意義があると感じる一方で、トラブルがあると予測できるとなると判断が難しいところ。

瀬川委員) 実習をできていない学生が勤務するということは考えにくい。実際に当事者だった方も勤務しているが、実習は必須だと感じる。服装などは確かに判断の難しいところ。

関原委員) 施設とのマッチングの問題かなとも思う。施設や団体によって考え方も異なるため、茶髪や金髪でも受け入れできる施設もある。また当事者性の強い学生をお受けすることもあるが、やはり先生方との連携が重要となる。一方で業務においては一般常識を求められることも多いため、一般常識を学んでいくことも必要となる。

5. その他

松木) 近年の若い学生において PC が使えない学生が非常に多くなっており、大学の卒論においても携帯で作成することが主流になってきている様子。こういった学生が多くなることで現場に配属された際に、困ることが出てくるのではないかと危惧するが、実際に委員の先生方の施設において、職員や利用者（患者）様において近年、何かお困りごとなどは出てきていないか。

阿部委員) 近年、発達障害などが一般化されてきて、こちらがカテゴライズしてしまっているということもあると思うが、当事者性のある学生や新入職員が増えている気はする。業務においてはどうしてもマルチタスクが発生するため、難しさを本人たちも感じている様子はある。また臨機応変に対応することができなくなっている気がする。

松木) 医療機関を目指す学生は多くいるが、実際の業務のイメージをどこまでできているかは不明。実際の現場ではマルチタスクが生じること、また想定通りにいくことは少なく、その状況によって臨機応変に対応することが求められるということを就職担当にも、共有し学生に伝えていく。

関原委員) 一番困っているのは採用ができないこと。「採用できない≡人材を育成する余裕がなくなる」となるので、現場で働くワーカーも新人教育できるかなという不安がある。

瀬川委員) 人手不足が一番の悩みではある。また、当事者性が強い方がダメということではなく、他の委員の先生も仰る通り、マニュアル通りに進むことがほとんどなく、臨機応変に対応することが必要になる。これが課題になる方が増えている。また先ほど、PC が使えない学生が増えているという話を聞き、就労移行で事務に行きたい方には PC 必須として教えるため、できないとなると困ると思う。

阿部委員) 5月にコロナが5類に下げられることになっているが、次年度の実習について学校としてはどのように検討されているか参考までにお聞きしたい。5類に下がることで感染者など気にせずという医療機関もあるだろうが、世の中全体で行っていた感染対策が緩むことで、感染者が拡大することも想定されるため、これまで通りの実習が行えるかどうか、何とも判断が難しいところ。

岡崎) まだ十分に検討できていないが、次年度は全て配属実習と考えていた。ただ状況に応じ、検討する必要があると感じた。

根本) 今のところ医療機関も配属実習を行いたいと考えているが、コロナ感染対策を行う必要もあると思うので、検討することも必要かと思う。

松木) 現状の学内実習については保健局に許可をいただき実施している背景がある。コロナが5類に変更となり、その許可を得られるかどうか、保健局にも確認をしていく必要があるため、事前にお伺い立てを行い、状況がわかり次第、委員の先生方にも共有させていただく。

6. まとめ

- ・卒業生アンケートで実習に行けなかった学生の声を、在校生にも共有し、実習に行く際は、きちんと目的意識を持ち実施できるよう、実習指導において指導を強化する。
また、実習先と学生とのトラブルにおいてはマッチングの問題もあることから、配属先検討時にできる限りの調整を行っていく。
- ・カリキュラムポリシー全体の見直しを行っていく。カリキュラムポリシーは科目群でわかるのではなく、科目ごとに明確にすることを目指し、授業の質を高める。
- ・臨機応変に対応する力は在学中からも意識させる必要がある。授業ではある程度の正解があることが多いが、演習などを通して臨機応変な対応にも触れさせたい。

次年度は対面にて委員会を実施する。日程は後日相談とする。

以上